

# 豊明希望チャペル礼拝

2025/8/24

「信仰は聞くことから」

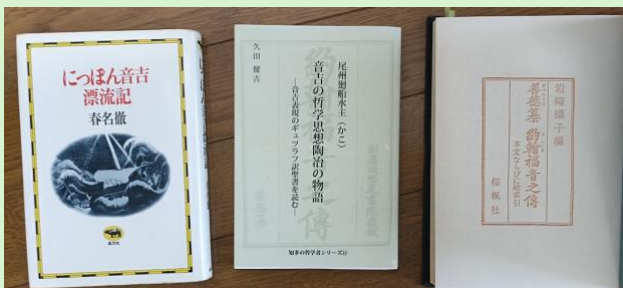
ローマ人への手紙 10：16～21

前回のローマ人への手紙では、10 章 15 節まででした。まず最初に、今一度その箇所をふり返ります。

**「10:14 しかし、信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。10:15 遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」と書いてあるようにです。」**

「宣べ伝える人」の大切さ。そして、宣べ伝えることの美しさに触れ、私たちも、キリストの証人として、身近な人、近隣の方々、求めている方々への、「宣べ伝える人」それゆえに、パウロの言う「美しき足」「美しき人」になろうと、教えられたのです。

そういうわけで、今回は、伝える人の大切さをパウロは語り、今日の箇所では、その続きとして、伝える人に対して、聞く人の事に触れるのです。そして、聞くことから信仰は始まるという主旨で話しを進めます。今日の中心箇所を読みます。



**「10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」**というわけです。

ところで、前回、このことを話す中で、三河出身、美浜町出身の漁師、とくに音吉という人について、少しだけ触れました。また、その際、こ

の音吉から日本語を習い、ドイツ人宣教師ギュツラフが、日本で最初の日本語聖書を翻訳したことをお話ししました。その後、ギュツラフと音吉等について、何冊か、関連する本を読み、ギュツラフ訳ヨハネの福音書等の復刻版を読んだりもしました。



まず、調べて驚いたのは、もう音吉のことがかなり、愛知県では有名であったということです。彼が 14 才で船で難破するまで、寺子屋で学んだ、お寺は、町おこしの拠点になっていました。(←良参寺：美浜町)



このように祈念碑が建てられて、1961年から毎年、町と日本聖書協会が合同で、記念式が行われ、「にっぽん音吉トライアスロン in 知多美浜」が1992年に行われ、まさに町おこしにさえ利用されているのがわかりました。ここから近いですから、一度行って見ようとも思っています。

また、映画などになっており、私も、一致しなかったのですが、その映画を見ておりました。三浦綾子原作の、『海嶺』ですね。

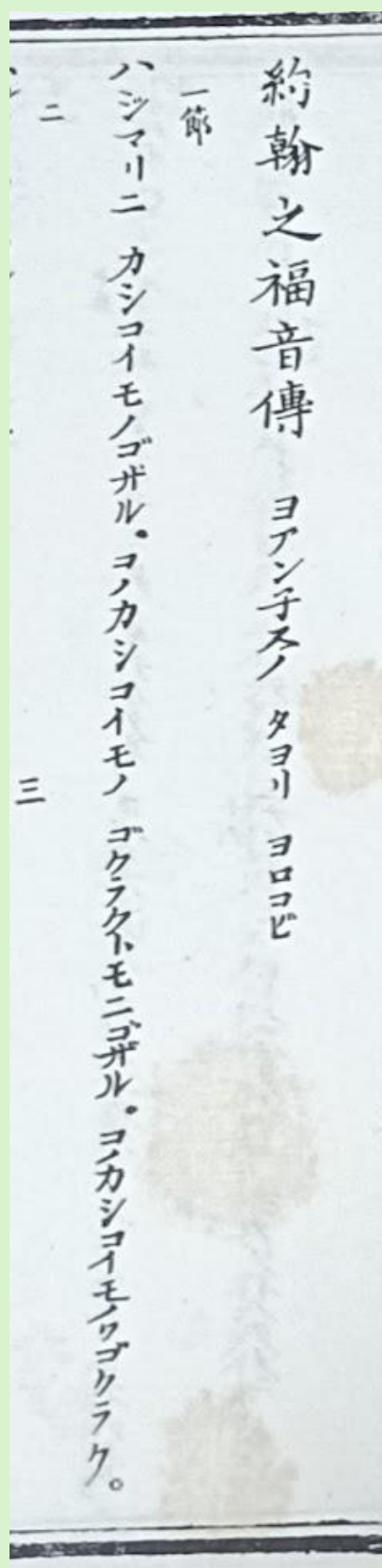
また、まとめて話せる機会があればと思いますが、一人の少年が船で流された先がメキシコ、そこから、イギリスへと渡り、1954年に、イギリスと日本の通商交渉が結ばれたときに、通訳として長崎に来ていることも理解しました。もっとも、ついには、

死ぬまで、日本の地を踏むことがなかったのですが、音吉の息子は、来日し、日本国籍をとったようです。



前回のローマ人への手紙のときに、ギュツラフの思いについて少し触れましたが、ドイツから宣教師として遣わされ、日本の宣教のために祈っていたときは、まだ鎖国の時代、黒船の前の時代、アメリカの宣教師もまだ日本に来ていない時代、それでも、日本のために祈っていたのだと思います。

その時に、彼は、音吉たちにマニラで出会ったとき、それは、神の恵みであり、神が祈りに答えてくれた結果だと思ったのだと思います。いつか、御言葉を伝えたい、そんな思いで、マニラで、聖書を音吉たちの力を借りて訳したので



す。その聖書は、ついに、日本に渡り、用いられることはなく、資料として、後の時代に発見されることになるのですが、残された聖書のヨハネの福音書のその一文は、まさに、「宣べ伝える人」の強い思い、祈りが込められた一文であると感じるのです。

(←ギュツラフ訳復刻版)

「はじまりに かしこいものござる。このかしこいもの ごくらくとにもござる。」(始まりに、ロゴス(カシコイモノ)がござる。このロゴスは、上帝(ごくらく)と共にござる。)

意味を、4 年前に出版された久田健吉(美浜町在住)著『音吉の哲学思想陶冶の物語』で、「カシコイモノ」はロゴスであり、キリストの事を指します。そして久田氏は「ごくらく」を、「上帝」天で地を治める神という意味で、また、それを極楽とよぶのは、「極楽へ導こうとされている神」という意味だろうと解釈します。それで、いいと思います。

神は、ひとり子キリストを、この地に遣わされた、それは、神が、このキリストを信じる者を、極楽、すなわち天国へ導くという計画に基づいてなのだという事です。

ギュツラフが、日本人に伝えたいと思ったことが、まさに、このヨハネの福音書 1 : 1 の一文の中に、込められているように思うのです。日本の人たち、私は日本の人たちにお伝えしたい。神は、神の子キリストを送って、これを十字架につけ、復活をし、その罪の贖いによって、日本のすべての人を天国へ導く計画をお立てになったのだ。このことを、是非知ってほしい。そして、信じて欲しいという祈りであり、メッセージであります。

そして、今日、このようにパウロが伝え、また、ヨハネが、さらには、時代を経て、ギュツラフが伝えた、御言葉を、ひいては、神が私たちを愛し、天国に導くために伝えて下さる御言葉を、たしかに受け取らねばならないと言うことです。どのようにして、それを受けとるのでしょうか。

それは、まずは、聞くことをもってです。あらためて、今日の箇所を今一度確認しましょう。

まず 16 節では、聞く人が少ないということを知

らねばならないと言うことです。誰でも、聞けるじゃないかと言うかも知れないけれど、本当の意味で、聞き、あるいは耳を傾けて聞き、私と関係のあることかもしれないと理解し、もっと聞かせて欲しいと、関心を持って聞くと言うことであります。

**「10:16 しかし、すべての人が福音に従ったのではありません。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか」とイザヤは言っています。」**

耳では聞いているようだけれど、右の耳から左の耳に抜けてしまうように、心にとめていないと言っているのです。それで、パウロは、聞き方に気を付けよ、心にとめるようにして聞けと言うのです。

**「10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」**

聞いたら、救いが実現するような、そんな聞きかたで聞けと言うのです。それは、「信じる」ということを伴って聞くと言うことであります。

実際、パウロは、小アジア、ギリシャ、ローマへの宣教によって実に多くの人が、神の言葉を聞いていた、福音を聞いてきたというのです。

おそらく、これから全世界の人がこの福音を聞く事になるだろうと、そんなことも想像しているのかもしれませんが、しかし、やっぱり本当の意味で聞き、信じる人は少ないだろうと言うのです。

**「10:18 では、私は尋ねます。彼らは聞かなかったのでしょうか。いいえ、むしろ、「その響きは全地に、そのことばは、世界の果てまで届いた」のです。」**

人々は、まるで聞かなかったかのように、教会には来ないし、その結果、クリスチャンとなる人が少ないと言うことではないのでしょうか。しかし、それでも、やっぱり、神は伝えているし、伝える人を確実に世界中に遣わしていると、パウロは言っているのです。だとすれば、それは、聞き方の問題だ。神が伝えていないのではなく、聞く人が、本当の意味で聞いていない。だから、信じていないし、クリスチャンとなっていない、そういう人が多いと言っているのだと思います。

それは、パウロの宣教の経験から来るばかりではなくて、歴史上、ユダヤの民が、御言葉を聞かされ、救いの招きをいただきながら、ユダヤ人もキリストを拒否し、多くが救われていないようにだと言うのです。

**「10:19 では、私は尋ねます。イスラエルは知らなかったのでしょうか。まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者たちであなたがたのねたみを引き起こし、愚かな国民であなたがたの怒りを燃えさせる。」**

このパウロの言い方の中には、私は、それでも、あきらめていないと言っているように聞こえます。

ユダヤ人は神の声を聞いていなくて、救われる人が少ないけれど、私はあきらめていない。その結果、私の経験上、神に選ばれているはずのユダヤ人よりも、神を知らない異邦人のほうが、聞いてくれ、心を開いて、神のメッセージを受け止めてくれた、信じてくれた。それは、異邦人が神に選ばれることによって、「ねたみ」や嫉妬をおこさせて、ユダヤ人が、私たちが天国に行くのではなくて、先に異邦人が、ほいほいと信じて行ってしまった。そんな、羨ましいな、嫉妬する・・・そんなふうに考えてくれて、一人でも、じゃあ、私も信じるというってくれるのではないかと、それが神の計画だったのではないかと期待し、信じているんだと・・・そんなことを言っているように聞こえます。

そして、こう付け加えて、この箇所を締めくくります。

**「10:20 また、イザヤは大胆にもこう言っています。「わたしを探さなかった者たちにわたしは見出され、わたしを尋ねなかった者たちに自分を現した。」**

**10:21 そして、イスラエルのことをこう言っています。「わたしは終日、手を差し伸べた。不従順で反抗する民に対して。」**



ユダヤ人も捨てられたわけじゃない。むしろ、その不従順で反抗的な民に、神様は「終日」すなわち、夜寝る暇もなく、救いの御手を差しのばし続けられている。今も、そうなんだ。だから、言い逃れる余地はないんだけど、今からでも、耳をかた向けて欲しい。あなたがたが軽んじているキリストこそ、キリストの教えこそ、神の御心である事を心に信じて欲しいと、そういつているだと思います。

さて、最初にお話しした音吉のこと。彼が、洗礼を受けたことは伝えられていますが、その他の、多くの事はまだ、あまりわかっていないようです。ただ、ギュツラフが、流された3人の、愛知出身の漁師達に、聖書の翻訳をお願いしたところ、音吉以外の二人は、キリシタンの書と聞いて、手伝うことを拒否したと言われています。それで、手伝ったのが、音吉だけだったというわけです(←1849年の音吉の肖像)。



当時、日本の庄屋さんの家や、道の辻に立てられていた高札です。

これは、正徳元年1711年から、幕末まで改正されていないキリシタン禁制

の高札です。キリシタンの宣教師を訴え出た者には銀 500、これは、小判 350 に相当し、今の価値になおせば、3500 万円です。それに次ぐ伝道師であっても、銀 300、踏み絵を踏んで一度はキリシタンであることを捨てて、また戻ってキリシタンとなっているものを訴えても同額銀 300 を与える。それらキリシタンをかくまっている家族や親族を訴えたら銀 100 与える。もし、それらのキリシタンを隠したら、名主はもとより、五人組すべての者を同罪とする。そういう高札です。もし、音吉がクリスチャンとなったなら、それは、命がけの告白であります。



ちなみに、これは、明治元年に(太政官：政府)によって、あらためて掲げられた高札です。ここには、キリシタン宗門は、これまで通り、ご禁制である。お互いに固く、守るように(キリスト教を信じてはならない)と言い、明治 6 年まで、これだけは、禁じると、いかにク

リスチャンになるのが厳しかったかが分かります。

海嶺の映画の中で、まだ鎖国中の日本にイギリスから帰ることが出来るとなったとき、日本が見える船が日本に近づこうとして、音吉たちが、やっと日本に帰れると思ったとき、日本から大砲が、音吉たちの船に向かって打たれ場面が出てまいります。そして、映画の中では、こう描かれます。クリスチャンとなった、音吉らが言うのです。「そうか、お上がわしらを捨てても、決して捨てぬものがあるのや」と。

日本が捨てても神は捨てないという意味です。

今、私たちは、神が私たちに遣わして下さった、ロゴスなる神、天国の約束を携え、来て下さったイエス様を信じることが出来る時代です。それは、本当に、先祖が待ち望み、多くの宣教師やクリスチャンが祈り、望んだことです。

今こそ、まさに、「手をさしだして」おられる神に、聞き、聞くだけではなく、心にとめ、信じて、この神を礼拝し、歩む者と決意したいのです。

この週、神に心を開き、御言葉に聞き、神の愛と福音を聞き、感謝と賛美の歩みをする者として、ここから歩み出しましょう。